

2歳児のテレビ接触実態とその規定要因の可能性

一色伸夫

1. はじめに

いま子どもたちの暮らしには、テレビ・ビデオ・テレビゲームなどの映像メディアが深く入りこんでいる。こうした映像メディアが、子どもたちの心身の発達にどのような影響を与えているのかについては、教育番組が認知能力の発達を促進するというポジティブな側面や、暴力的な映像が攻撃性を助長するのではないかというネガティブな側面など、様々な指摘や考え方があり、世界的に関心が高まっている。

映像メディアの影響・効果を検証するには、視聴時間といった量的な側面だけでなく、テレビ・ビデオ・テレビゲームといったメディアの種類、その内容、映像や音声の使い方、子どもへの見せ方、親のかかわり方など多角的な視点が必要になる。

そこで、NHK放送文化研究所では平成13年11月に、テレビを含む映像メディアが子どもたちの生活や成長・発達にどのような影響を与えているのかを研究・調査する「子どもに良い放送プロジェクト」を発足させた。このプロジェクトは、教育・心理・医学などの第1線の研究者と共同で、客観的なデータを収集し分析を試みるものである。調査対象は平成14年に神奈川県川崎市で生まれた1600人。毎年同じ子どもたちを、12歳になるまで継続して追跡調査する（これを「フォローアップ調査」と呼ぶ）。この調査では、12年間の蓄積によって始めて明らかになることも多いと考えられるが、本稿では0・1・2歳のいわゆる乳児期の3年間の調査を終えた現時点で読み取れることと、今後の調査継続に資する知見について報告したいと思う。

2. 方法および映像メディア接触に関する概念についての定義

「フォローアップ調査」の第3回調査は前年に引き続き以下のような形で行なわれた。

(1) 〔調査の概要〕

調査時期：平成17年1月13日(木)～19日(水)

調査相手：平成14年2月～7月に川崎市で生まれた乳児1244人（この時期に川崎市で生まれた約6000人の中から、居住地域による層化を行い、無作為に選んだ1600人の保護者に継続調査の趣旨を説明し、協力を依頼した。上記の1244人の数字は、第3回調査への協力を表明した保護者の総数である。）

調査方法：A. 映像メディア視聴日誌（24時間日記式）

B. 質問紙による郵送配付・回収法（2回に分けて実施）

有効回答数(率)：A 1060人(85.2%) 注)有効率は1244人に対する割合

B-1 1105人(88.8%)

B-2 1098人(88.3%)

調査項目：A テレビ視聴実態調査(映像メディア視聴日誌記入方式)

子どものテレビ視聴・接触実態を15分目盛り日記式で1週間分記録した。時間・内容・視聴形態を保護者が記入。ビデオ・テレビゲームについても併せて調べた。

B-1 家族の生活とメディア接触に関する質問紙調査

親の養育態度、親子関係、子育てストレス、子どもの気質、子どもの行動発達、および映像メディアへの態度などについて、保護者が記入。

B-2 言語発達調査(マッカーサー乳幼児言語発達質問紙調査)

具体的な言葉や文法について表現できるかどうか、保護者が記入。

調査相手が2歳児であるため、調査票の記入はすべて保護者に依頼したが、この調査では保護者の考え方や生活行動などを乳幼児に対する家庭環境の一部にとらえ、2人の保護者に別々に回答してもらった。

A. 映像メディア視聴日誌

映像メディアの接触については、調査相手である乳児のメディア接触を「保護者1」(中心となってその子どもの世話をしている大人)に記入してもらった。

この調査票では、乳児の生活(1週間分)について、テレビ、ビデオおよびテレビゲームに接触していた時間や番組名などの内容だけでなく、テレビ、ビデオについては誰と一緒に見ていたか(具体的に)、「他のことはせず専念して見ていた」か「他のことをしながら見ていた」か、それとも「画面がついているだけだった」かを分けて記入する方式を採用している。その他に、子どもの映像メディアへの接触以外の活動(屋内遊び、屋外遊び、絵本読み)、生活のようす(起床・就寝時間)についても記録してもらった。

B-1 質問紙(保護者1, 2)

保護者の意識と生活に関する質問紙調査は、「保護者1用」と「保護者2用」の2種類がある。それぞれ記入者と乳児の関係を確認したところ、「保護者1」は全員が「母親」であったので、本報告書では「保護者1」という表記の代わりに「母親」を用いる。

B-2 追加質問紙(保護者1)

昨年度と今年度に限り、「保護者1用」に追加して「日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙『語と文法』」を別紙として2月に送付した。これは、「保護者1用」の質問紙の分量が多くなるため、回答者に対する負担が一時期に集中するのを避けたため、1月の本調査とは別に2月に送付した。

次節以下に紹介するのは、上記調査のうち「フォローアップ第3回調査」の映像メディア視聴日誌の記録を中心に、2歳児のテレビ接触行動の現状と0および1歳時点からの変化について分析したものである。

(2) [映像メディア接触に関する概念についての定義]

A. 映像メディア

第1回から今回まで、映像メディアとしては「テレビ」、「ビデオ」、「テレビゲーム」の3つを挙げている。将来的には「パソコン」や「携帯電話」などを映像メディアに含めなければならない事態も想定されるが、2歳児という年齢を考慮し、今回は上記の3つのメディアに限定した。

それぞれのメディアについての定義は、次のようにした。

- ①テレビ：地上放送、衛星放送、ケーブルテレビ
- ②ビデオ：DVD、ハードディスク・レコーダを含む
- ③テレビゲーム：携帯型のものを含む

B. 視聴態様について

B-1 「視聴」と「接触」

テレビ「視聴」の定義やその実際上の測定方法には多くの議論がある。とりわけ「0歳、1歳、2歳という発達段階にある子どもが『テレビを見る』ということは、その子の成長・発達にどのような影響・効果を与えるのか、「テレビを『見ている』とはどういうことか」、また、「テレビを見ているということ、どうしたら正確に測定できるか」などの論点がある。この調査では子どもがテレビを見る「態様（見方）」によってその影響の度合いに差が出るのではないかと考えて、テレビへの「接触」を下記の「専念視聴」、「ながら視聴」および「ついでにだけ」の3つに分けて扱うことにした。それらの判定は記入者である保護者に委ねている。

- ①他のことはせず専念して見ていた（専念視聴）
 - ②他のことをしながら見ていた（ながら視聴）
 - ③画面がついていただけだった（「ついでにだけ」と略記）
- 視聴（いわゆる「見る」）

B-2 「単独視聴」と「随伴視聴」

テレビの見方の違いを見る軸としてもう1つ、誰と一っしょに見たのかについてもたずねている。

- ①子ども（たち）だけで見ていた（単独視聴）
- ②保護者と一緒に見ていた（保護者との随伴視聴）
- ③保護者以外の大人と一緒に見ていた（その他の随伴視聴）

保護者以外の大人と一緒に見ていたケースは、ほとんどなかったため、今回の報告書が扱うデータは、②と③を合計して「大人との随伴視聴」の数字を表記することとする。

3. 2歳児はテレビ番組をどのように見ているか

第3回フォローアップ調査（2歳児）のメディア接触の実態がどうなっているのかをテレビを中心に報告する。この場合、1歳児、0歳児と遡って子どもが生まれてから2歳になるまでの乳児期のテレビ接触の変化についても言及していくこととする。あわせて次章では、子どもの生活環境、親の養育態度やテレビの見方など子どもをとりまく環境とも関連させて論考をしていくこととする。

2歳児の映像接触時間

映像メディアへの接触はやや減って3時間30分

2歳児の全映像メディアの接触は、1日平均3時間30分で、この時間量全体は、1歳児の時の4時間2分と比較すると減少した。メディア別に見ると、テレビが1日平均2時間44分で1歳児の時の3時間23分より39分減った。ビデオが43分（1歳37分）、テレビゲームが3分（同2分）で、あったから、この減少はテレビ接触の減少によるものである。（図1）

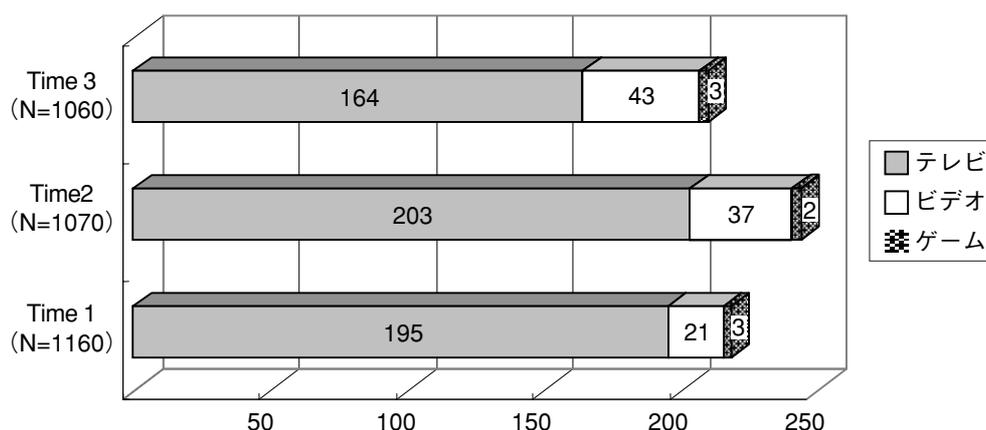


図1 0歳児、1歳児および2歳児の映像メディア接触時間（分・1日平均）

大きく減少したのは「ついでにだけ」の時間

子どものテレビ視聴を専念の程度で見ると、「ついでにだけ」という状態は年々減少し、1時間12分になった。また「ながら視聴」も1歳より減って1時間8分であった。「専念視聴」は小数点以下を四捨五入すると24分で1歳児の時と同じである。（図2）

次に誰といっしょに見ているかについては、テレビ総接触量（2時間44分）のうち52分は子どもだけで見ている。大人と一緒に見ているのは、1時間52分である。1歳時点と比較すると、子どもだけで見ている時間量も大人と一緒にみている時間量も、ともに減少している。（図3）

最後に、子どもの性別ごとの視聴の様子と、性別によるテレビ接触時間の経年変化を見た（図4）。男女ともに1歳児の時点に比べ2歳でテレビ接触時間が減っている。

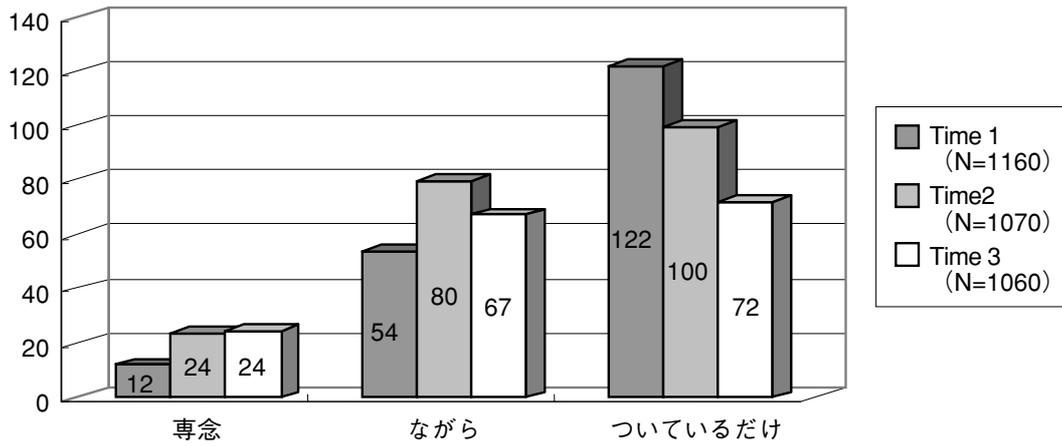


図2 (専念・ながら)別 テレビ接触時間の推移(1日平均・分)

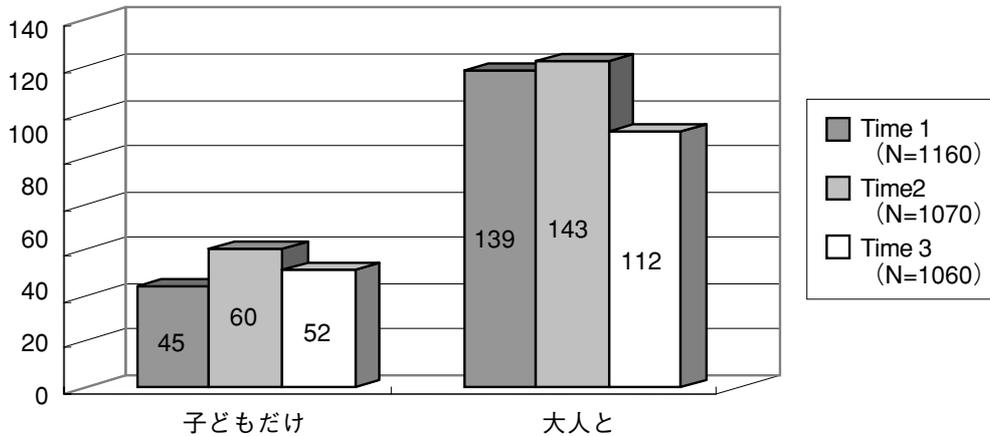


図3 (単独・随伴)別 テレビ接触時間の推移(1日平均・分)

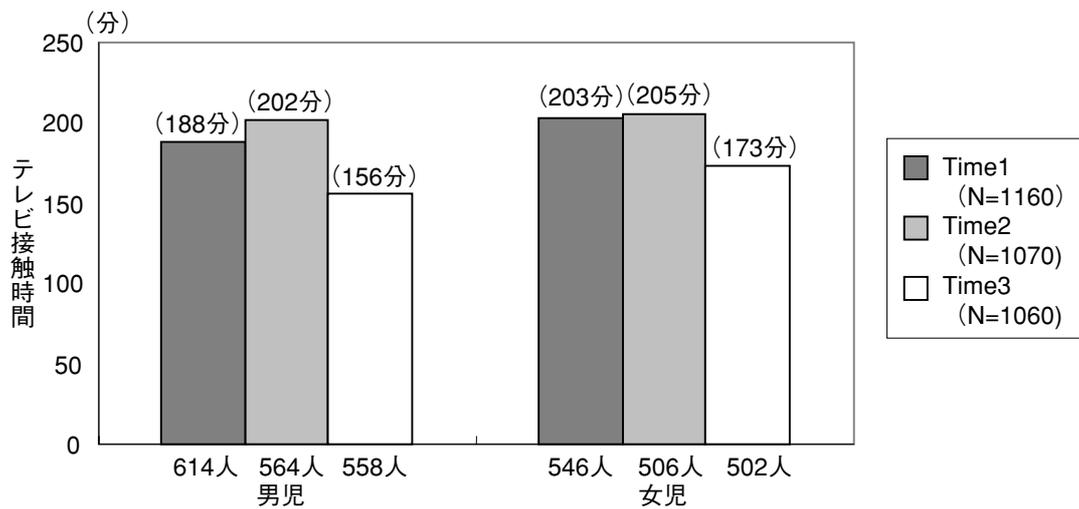


図4 テレビ接触時間の推移(1日平均・分)

テレビ接触時間を0歳から2歳まで経年で追跡してみて、0歳時点では「ついでにだけ」の時間がテレビ接触時間に占める割合が高かったものが、1歳児点では「ながら視聴」と「専念視聴」が増えて、1歳児がテレビを見始めている様子がうかがわれた。今回の2歳時点では、「専念視聴」は微増したものの「ながら視聴」「ついでにだけ」は減少した。

2歳児は0、1歳児の時に比べ、当然のことながら自分で動き回れる範囲は拡大する。

質問紙でも、「まったくテレビに関心を示さない」は0歳時点の4.7%から2歳時点では0.1%に減少し、逆に「テレビの内容もいくぶん理解しはじめている」は0歳時点の3.3%から2歳時点では39.7%に増えている。このような子どもの生活の変化やテレビに対する興味の高まりが視聴態様別のテレビ接触時間を変化させていると考えられる。今後の調査で更にデータを積み重ねて検証していきたい。

次章以降では2歳児のテレビ接触時間を規定する要因の可能性との関係でさらに分析をしていく。

4. テレビ接触の規定要因の可能性

2歳児の、視聴時間だけでなく、見てなくてもテレビ画面に触れる時間を含めた「テレビがついている状態」を総体として眺めてみると、子どもや保護者の番組嗜好性以外の要因が考えられる。

また、乳幼児の場合、意識的にテレビに向かう視聴行動だけでなく、なにげなく触れている近くのテレビの内容を、環境刺激として影響をうけていることも考えられる。例えば、乳幼児の場合、ドラマとニュースの区別はなく映画を現実のものとして受け取るとは知られており、保護者の見る映画に現れる怪物に襲われるのではないかと不安に悩む幼児のケースなどが報告されている。

そこで、子どもを取り巻く様々な要因と、メディア接触時間に関連する変数との関係をクロス集計して調べてみた。その結果、以下の要因において、メディア接触時間との関連が見られたので報告する。なお、分析対象となったのは、映像メディア視聴日誌、質問紙、追加質問紙の3種類の調査用紙全ての返送があった1016人である。

4-1 保護者の監督機能

テレビの接触量と保護者の子どものテレビ視聴に対する監督機能の関係について、「見てよい番組決め」「見てよい時間決め」「食事中のテレビ接触」の3つの観点において関連が見られた。

まず、「〇〇ちゃんが見てよい番組を決めている」という設問に対し、「あてはまる」「ややあてはまる」と回答された場合を「決めている」、その他の選択肢を合算したものを「決めていない」として群分けを行った。集計の結果、「決めている」と回答された群の子どもの1日平均テレビ接触時間は154分、「決めていない」群では181分であり、見てよい番組が決まっている子どもの方が、テレビ接触時間が短い ($t=3.83, p<.01$) (図5)。

また、「〇〇ちゃんが見てよい時間を決めている」という設問に対し、「あてはまる」「ややあてはまる」とした回答を「決めている」群、その他の選択肢を合算したものを「決めていない」群として集計したところ、テレビを見てよい時間が決まっている子どもの方が、テレビに接触する時間が短いことが明らかになった ($t=4.11, p<.01$) (図6)。

食事中のテレビ接触については、テレビを「つけない」「つける」「両方」の3つの群で比較したところ、群間に有意な差がみられた ($F(2,996) = 87.05, p<.01$)。Tukey法による多重比較

より、全ての群の間に1%水準で有意な差がみられ、テレビをつけたまま食事をしている子どもの方が、テレビの接触時間が長い（図7）。

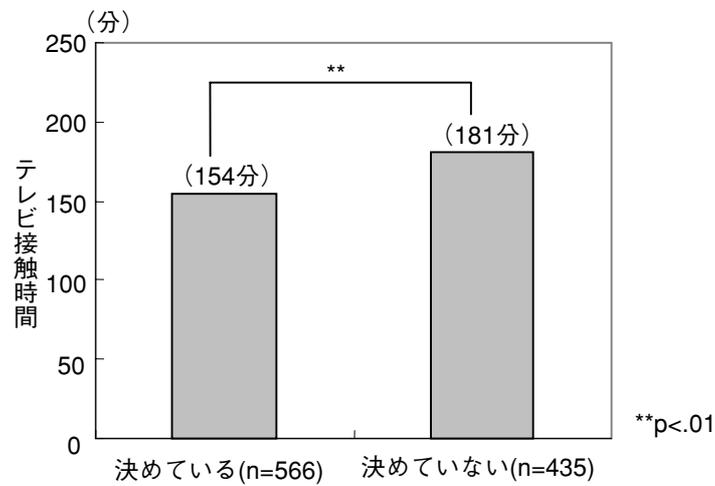


図5 「見てよい番組決め」との関係

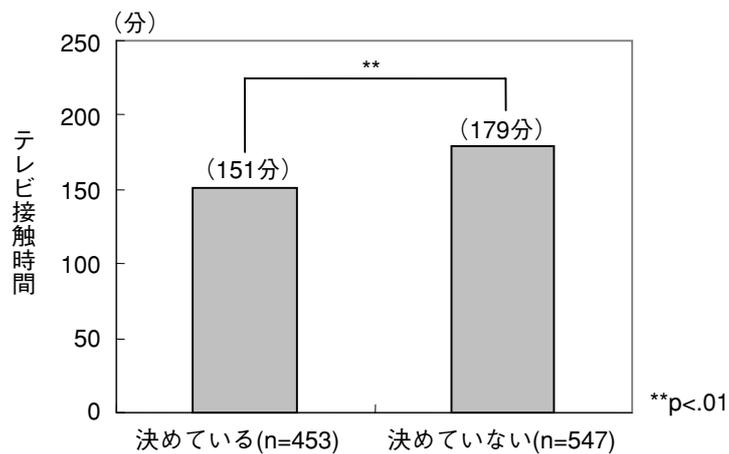


図6 「見てよい時間決め」との関係

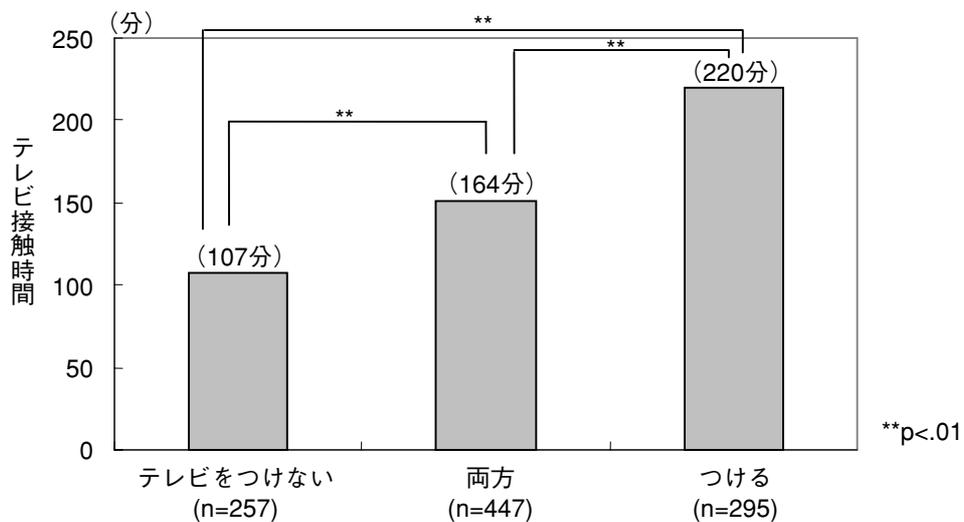


図7 「食事中テレビ接触」との関係

4-2 保護者のメディア観

保護者のメディア観については、テレビとビデオそれぞれで関連が見られた。

まず、テレビの影響観について、「良い影響の方が多い」「どちらかといえば良い影響が多い」という回答を「良い影響」群、「悪い影響のほうが多い」「どちらかといえば悪い影響が多い」という回答を「悪い影響」群、「どちらともいえない」を「両方」とし、3群の比較を行った。その結果、群間に有意差が見られ ($F(2, 1007)=6.71, p<.01$)、Tukey法による多重比較の結果、「良い影響」群と「悪い影響」群の間に1%水準で有意な差がみられた。テレビは子どもにとって良い影響の方が多いと思っている親を持つ子どもの方が、テレビ接触時間が長い(図8)。

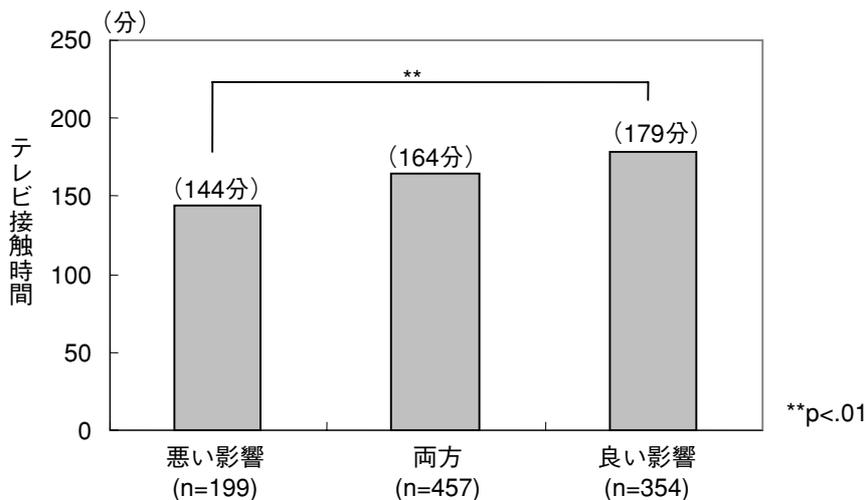


図8 「テレビ影響観」との関連

次に、ビデオの影響観について、「ビデオなら安心して○○ちゃんに見せておける」という設問に対し、「あてはまる」「ややあてはまる」とした回答を「安心できる」群、「あてはまらない」「ややあてはまらない」とした回答を「安心できない」群、「どちらでもない」を「中間」として集計し、テレビと同様に、ビデオ接触時間とビデオ影響観との関連を検討した。その結果、ビデオ影響観の群間に有意差が見られた ($F(2, 1002)=18.19, p<.01$)。Tukey法による多重比較の結果、「安心できる」と「安心できない」、「安心できる」と「中間」の間に1%水準で、「安心できない」と「中間」の間に5%水準で有意な差が見られた。ビデオは安心できると考えている親を持つ子どもの方がビデオ接触時間が長い(図9)。

また、ビデオについては、子育てへの有用度に関しても関連が見られた。「ビデオは忙しいときに子育ての助けになるか」という設問に対し、「助けにならない」「やや助けになる」「助けになる」のいずれかをたずねた。その結果、ビデオ接触時間と子育て有用度には有意な関連が見られ ($F(2, 1002)=17.00, p<.01$)、Tukey法による多重比較の結果、「助けになる」と「助けにならない」、「助けになる」と「やや助けになる」の間に1%水準で有意な差が見られた。このことから、ビデオは子育ての助けになると思っている親を持つ子どもの方が、ビデオ接触時間が長いことが明らかになった(図10)。

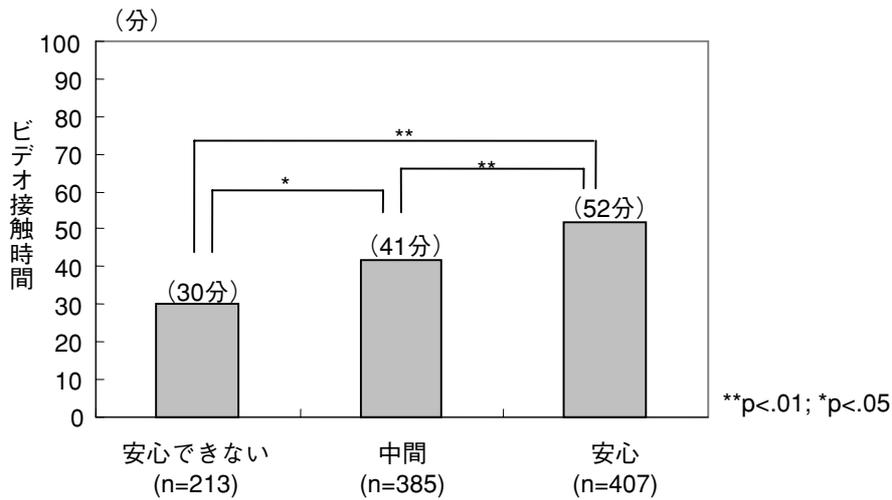


図9 「ビデオ影響観」との関係

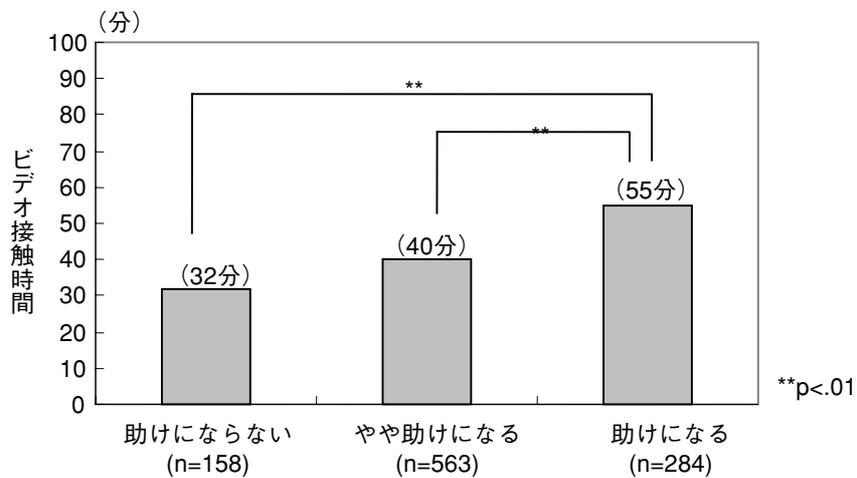


図10 「ビデオ影響観」との関係

4-3 子どものビデオの見方

ここでは、子どものビデオの見方について関連が見られた項目を報告する。

まず、「同じビデオを1日に何度も繰り返し見るか」という設問に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答したものを「繰り返し見る」群、その他の選択肢の合算を「繰り返し見ない」群としてビデオ接触時間を比較したところ、有意な差が見られた ($t=11.78, p<.01$)。図11より、ビデオを繰り返しみている子どもの方がビデオ接触量が多いことが読み取れる。

また、ビデオの視聴の仕方について、「ひとり（子どもだけ）で見ることが多いか」という設問に対し、「あてはまる」という解答を「子どもだけ」群、「あてはまらない」という解答を「親子でみる」群、その他の選択肢の合算を「両方」とし、これら3つの群とビデオ接触時間の関連を分析したところ、群間に有意差が見られ ($F(2, 989)=8.49, p<.01$)、Tukey法による多重比較を行ったところ、「親子でみる」と「両方」、「親子でみる」と「子どもだけでみる」の間に1%水準で有意な差が見られた (図12)。したがって、ビデオを親子で見ている子どもの方がビデオ接触量が少ないことが明らかになった。

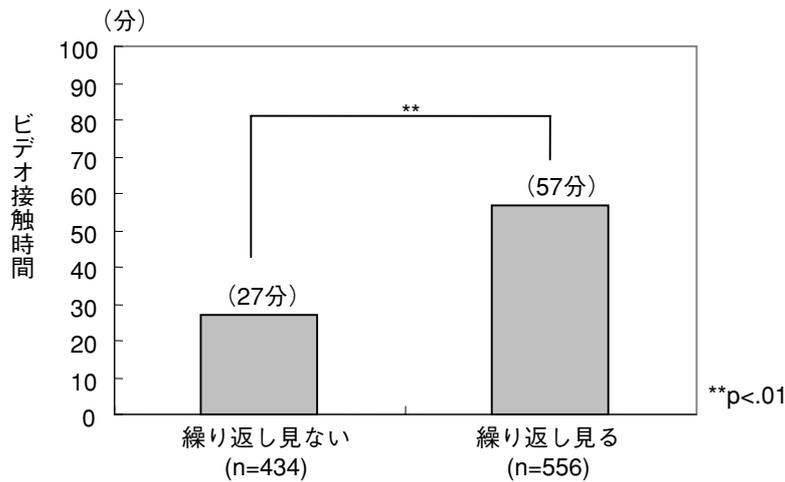


図11 「くりかえし視聴」との関係

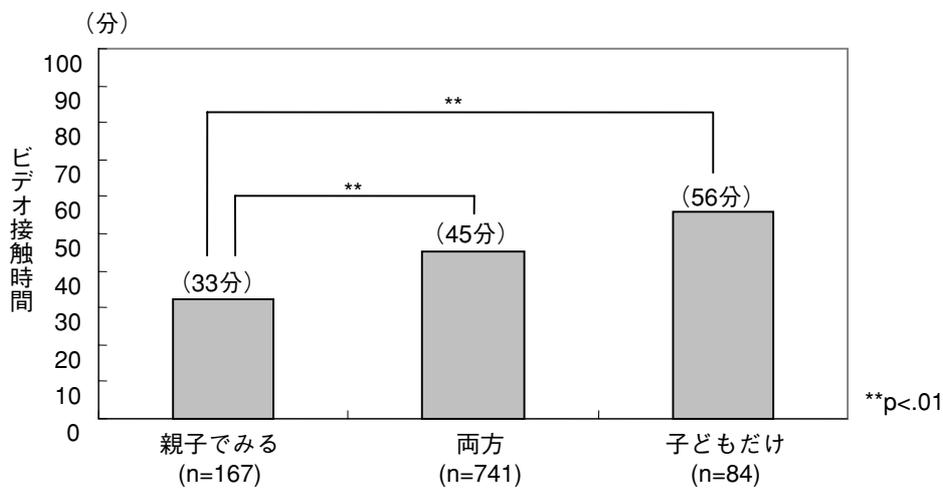


図12 「ひとり視聴」との関係

4-4 子どもの生活習慣

ここでは、子どもの生活習慣について、「絵本を親が読み聞かせる頻度」「外遊びの時間」の2つについて検討した。

まず、絵本を読み聞かせる頻度について、「○○ちゃんに絵本をよく読んであげる」という設問に対し、「あてはまる」という回答を「よく読んであげる」群、「ややあてはまる」という回答を「時々読んであげる」群、その他の選択肢の合算を「あまりない」群として、テレビ接触時間と読み聞かせる頻度の関連を検討したところ、群間に有意な差が見られ ($F(2, 1003)=20.99, p<.01$)、Tukey法による多重比較の結果、「よく読んであげる」と「あまりない」、「時々読んであげる」と「あまりない」の間に1%水準で、「よく読んであげる」と「時々読んであげる」の間に5%水準で有意な差がみられた (図13)。このことから、絵本を親によく読んでもらっている子どもの方がテレビ接触時間は短いことが明らかになった。

外遊び時間とテレビ接触時間の関係について分析したが、有意な関連性は見られなかった。

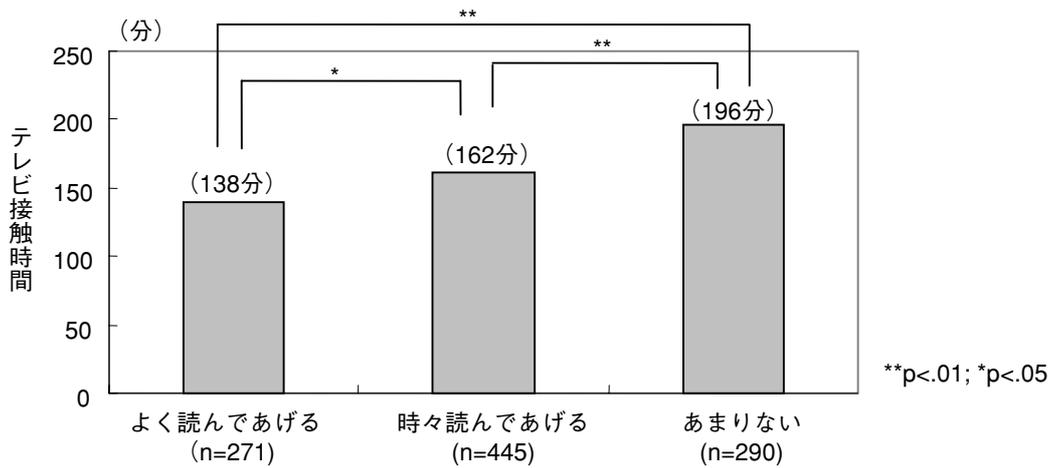


図13 「読み聞かせ頻度」との関係

4-5 子どもの協調性・共感性

ここでは、子どもの協調性・共感性との関係を検討した。子どもの協調性・共感性得点が高い順に、人数で4分割し、それぞれをHH, SH, SL, LL群とした。その上で、得点の高いHH,SH群を協調性・共感性が「高い」群、得点の低いSL, LL群を「低い」群とした。その結果、テレビ・ビデオの合計接触時間との関係がみられ、協調性・共感性が低い子どもの方が、テレビ・ビデオの接触時間が長いことが明らかになった ($t=3.27, p<.01$) (図14)。

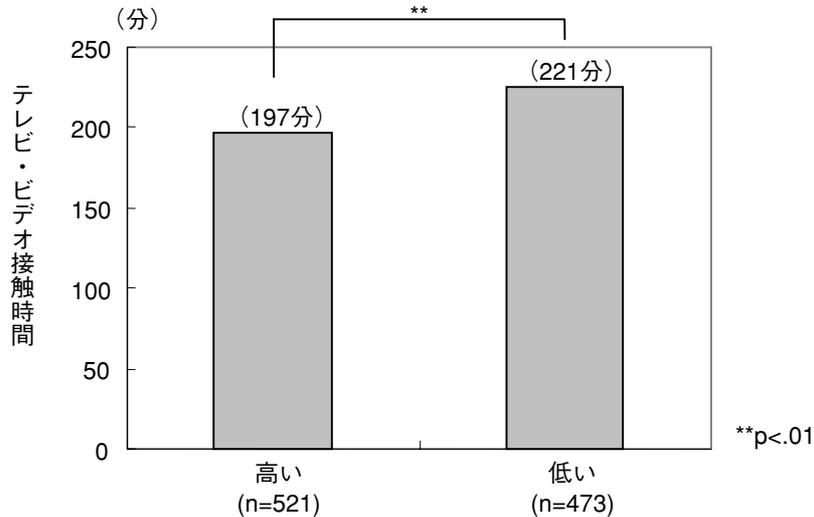


図14 「子どもの協調性・共感性」との関係

4-6 子どもの友だち関係

まず、子どもの友だち遊びとの関係について、「友だちの数」と「友だちとの遊びの回数」の2つの観点において関係がみられた。

テレビ・ビデオの合計接触時間と友だちの数の関係については、友だちの数を、「0～1人」「2～3人」「4人以上」の3つの群に分けて比較をした結果、群間に有意な差が見られた (F

(2,998)=14.52, $p<.01$)。Tukey法による多重比較の結果、「0～1人」と「2～3人」、「0～1人」と「4人以上」の間に1%水準で有意な差があった。このことから、友だちが0～1人の子どもの方が、テレビ・ビデオ接触時間が長いことが明らかになった(図15)。

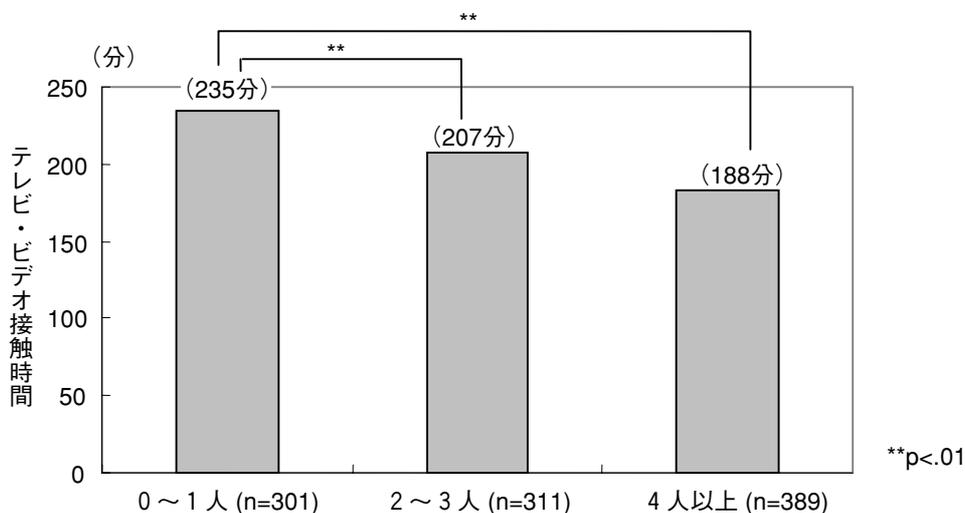


図15 「友だちの数」との関連

また、テレビ接触時間と友だちとの遊び回数の関係について検討した。遊びの回数を、1週間に1回以下の場合に「少ない」、2～3回を「普通」、4回以上を「多い」とし、テレビ接触時間との比較を行った。その結果、回数間に有意な差が見られ ($F(2,999)=19.61$, $p<.01$)、Tukey法による多重比較の結果、全ての群の間に1%水準で有意な差が見られた(図16)。

このことから、友だちと遊ぶ回数が多い子どもの方が、テレビ接触量が少ないことが明らかになった。

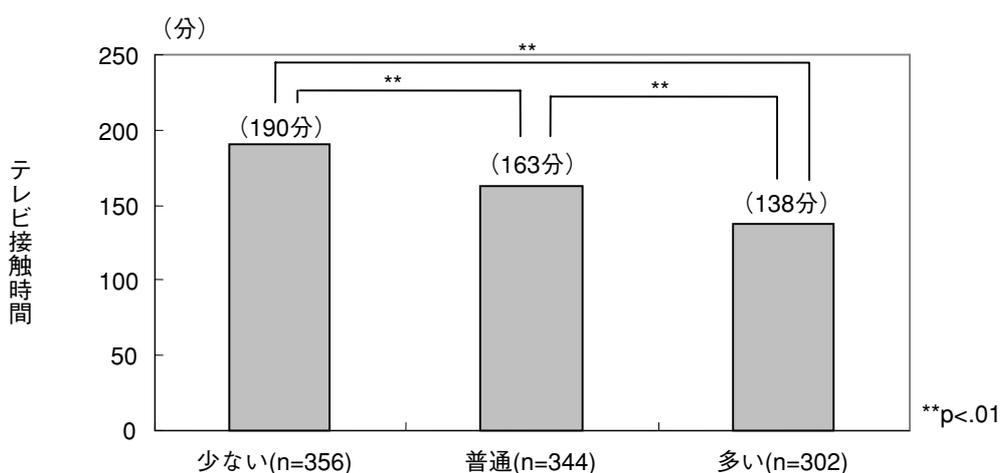


図16 「友だちとの遊び回数」との関連

さらに、子どもの友人作りへの保護者の積極性と、テレビ接触時間との関連を検討した。「〇〇ちゃんがお友だちをつくれるような場所に連れて行ったか」という設問に対し、「週2回以下」という回答を「消極的」、「週3～4回」を「普通」、「週5回以上」を「積極的」とした。番組のジャンルごとに検討した結果、教育番組への接触時間について有意な関連がみられた ($F(2, 974) = 6.63, p < .01$)。Tukey法による多重比較の結果、「消極的」と「積極的」の間に1%水準で有意な差がみられた (図17)。このことから、子どもの友だち作りに対して親が積極的な方が、子どもの教育番組への接触時間が長いことが明らかになった。

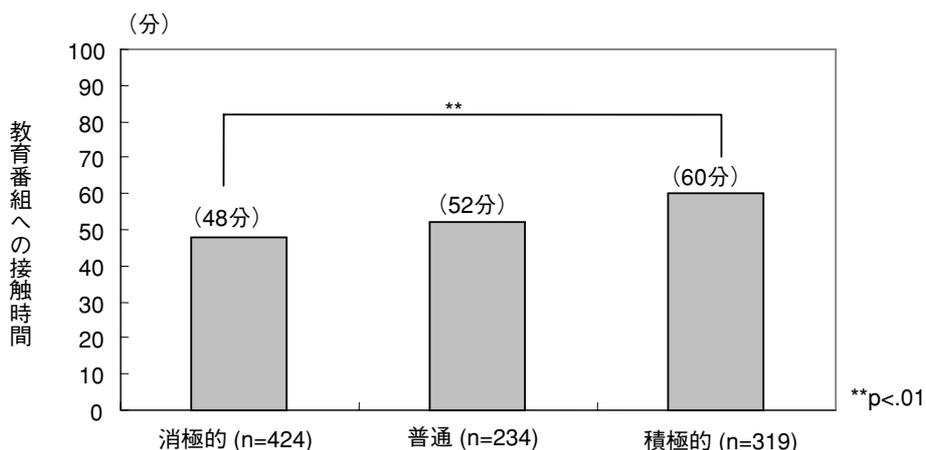


図17 「子どもの友人作りへの、保護者の積極性」との関連

4-7 母親の子どもへの信頼感

ここでは、母親の子どもへの信頼感と映像メディア接触時間（テレビ・ビデオ・ゲームの合計接触時間）との関係を見た。子どもへの信頼感得点を、協調性・共感性得点と同様に「高い」群、「低い」群に群分けした。分析の結果、信頼感の高低の間に有意差が見られ ($t = 2.74, p < .01$)、母親の子どもへの信頼感が低い方が、映像への接触時間が長いことが明らかになった (図18)。

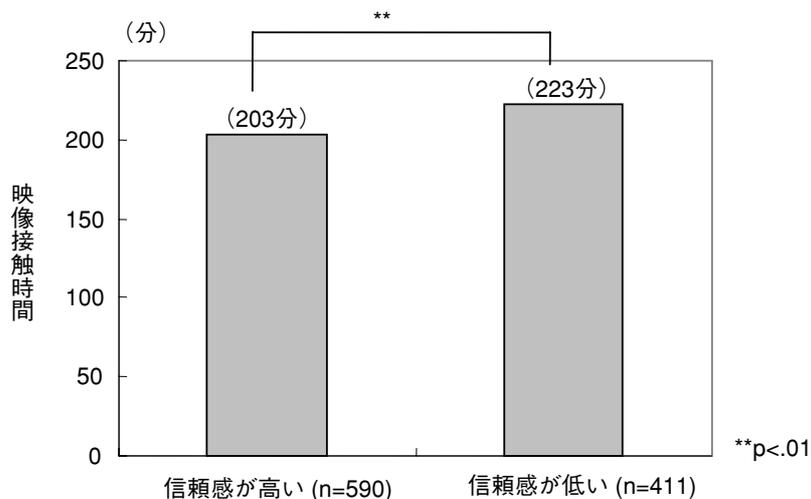


図18 「信頼感」との関連

これまで見てきたように、子どもを取り巻く様々な要因と、テレビ接触時間やビデオ接触時間との関連を調べた結果をまとめてみると、保護者のメディア観や監督機能、子どもの絵本読みや外遊びなどの生活機能、子ども自身の協調性・共感性や友達関係、保護者の子どもへの信頼感などが子どものメディア接触時間と関係があることがわかった。今後は、これらの要因間の因果関係を解明し、テレビを中心としたメディア接触時間を規定する要因を明らかにしていきたいと考えている。